

琉球大学学術リポジトリ

平成20年度COE宿泊研究会実施報告

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム広報委員会 公開日: 2009-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大瀧, 丈二, Otaki, Joji メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9471

平成20年度COE宿泊研究会実施報告

大瀧 丈二（広報担当）

平成20年度COE宿泊研修会が2008年11月30日（日曜日）～12月1日（月曜日）に、沖縄県南城市佐敷町のウェルサンピア沖縄にて開催された。事前登録参加者は教員15名、COE研究員および公募研究員6名、大学院後期課程学生3名、研究協力課1名であったが、さらに当日参加者が来場し、最終的な参加人数は30名を超えるほどであった。

最初に、グループ・リーダーの日高道雄教授（理学部）から遺伝子の多様性グループの紹介があった。土屋誠教授（理学部・COEリーダー）の開会挨拶が遅れるという軽いハプニングがあったが、場を和ませるポジティブな効果をもたらした。



引き続き、徳田岳助教（分子生命科学研究センター）からは「シロアリから深海エビまで：共生系研究と今後の展望」と題した発表があり、シロアリ研究はもちろん、深海調査の苦労談や論文が受理されるまでの経緯などが話された。大瀧丈二准教授（理学部）からは「楽しい研究の話」と題し、哲学的な解釈とともに、チョウの色模様の多様性および蛋白質配列の多様性に関する発表があった。



種多様性グループからはグループ・リーダーの太田英利教授（熱帯生物圏研究センター）からのグループ紹介があったあと、太田教授・広瀬裕一教授（理学部）との共同発表として「隠蔽種と見過ごされている種：どのくらいいる

のか？なぜ重要なのか？」と題した発表があった。太田教授は両生類・爬虫類の事例を紹介しつつ、隠蔽種問題を論じた。広瀬教授は形態に基づいた記載研究ができる人材育成の重要性を強調した。続いて、酒井一彦准教授（熱帯生物圏研究センター）からは、「地球温暖化によってサンゴ礁生物の高種多様性域は高緯度にシフトするか？：同一プロトコールによる広域定量モニタリングの必要性」と題した発表があり、サンゴ礁環境調査を点ではなく面として行う重要性が指摘された。

生態系多様性グループからは、グループ・リーダーの土屋教授によるグループ紹介を兼ねた研究発表があった。引き続き、藤村弘行助教（理学部）からは、「生物多様性における化学グループの成果」と題し、化学分析から生体系をモニタ・評価する研究発表が行われた。最後に、土屋教授による全体総括および総合討論が行われた。



全体として、若手研究者の活発な質疑応答があり、学術的にもレベルの高いものとなった。琉球大学21世紀COEプログラムも最終年度となったため、最後の総合討論は予定より1時間延長し、プログラムの方向性をまとめなおし、成果を今後につなげるべく、様々なアイデアが討議された。その後、懇親会が開かれ、研究者同士が交流を深めることができた。懇親会後も深夜まで熱い討論が続いた。

